

令和7年度 学校教育評価書（長等小学校）

評価の基準（3:よくできた 2:できた 1:あまりできなかった 0:まったくできなかった）

項目	評価の観点	自己評価 (3・2・1・0)	学校関係者評価 (3・2・1・0)	教職員自由記述(評価の理由など)	学校関係者自由記述(評価の理由など)	次年度への提言	関連するSDGsの 目標(参考)		
主体的・対話的で深い学び	1 支持的風土を育てる学級・学年集団づくりの実践	B		○授業の中で発言に対して聴く姿勢を大切にすることで、支持的風土を育てることができた。○学級づくりにおいて、児童一人ひとりが安心して過ごし、自分の思いや考えを表現できる支持的風土の形成を意識して取り組んだ。○日常の声かけでは、努力や過程を認めることを大切に、自己肯定感を高めるよう努めた。また、困り感を抱える児童が孤立しないように安心して、何事にも挑戦できる学級づくりを行ってきた。○様々なグループで共通の目的に向かって協働したり、伝えたいという思いを話し合ったりすることができるような活動を設定した。●ICTを有効活用して共有する機会が少なかった。○「友だちつながりスキル」を長等つ子タイムに行ったり、ペア活動や班活動を積極的に取り入れたりとすることができた。○クッキングや、掲示物などを一緒に物を作る体験を多く計画実施した。その際、計画等話し合いするなど、自分の考えを伝え合う活動も多く実施した。○自分の考えを伝え、相手の意見を受け止める活動を通して、伝え合う喜びを実感できるよう工夫した。○メタモジを使ってプレゼンや発表をするための原稿をつくることで、楽しみながら発表できるようにした。●ICTを活用した指導を自分自身がと学ぶ必要がある。○社会科研究大会に向けて、子どもたちが主体的に学習したいと思える魅力ある問いを設定し、学習の中で対話を通して個の学びをつなげ、深めるための手立てなどを研究することができた。○授業研究や研修会で、どのような活動すれば深まるのか具体的な対策を考えた。それを実践したりすることができた。●授業研究や研修会は、数が少なく、授業を見てもう機会もなかなか無かった。○近江社に向けて、未来を語り、自分たちが感じたことを学年で共有しながら教材研究を進めていくことができた。	○アンケートの結果からも学校が安心して過ごせる場所であることがわかる。自己肯定感を高められる場所であることも感じられる。○教職員は伝統ある長等小学校での教育活動に真剣に取り組んでおられる姿を見ている。地域として状況を知るOBとしてできる限りの協力をしていきたい。より前向きな活動のできる児童の育成のために尽力をお願いしたい。○地域の探検、ウォークラリーなどを通して学び地域の人の話を聞いたりとすることもコミュニケーション能力の育成につながっていると思う。自ら学ぶ姿勢を育てていく。○地元を知る、みんなで調べ、地元をもっと良くするにはどうしたら良いかなど子どもたちが興味を持ちやすい題材を用いているなことを学べていると思う。●自分から発表する意欲を感じられない。ゲームや趣味など自分の好きなものを発表しプレゼンするなどしたらよいと思う。	昨年度と比較し、項目1は±0、項目2は+0.1、項目3は-0.2となった。項目1と2については、微細な変動ではあるが、それは研究を進める過程で明らかになってきた成果と課題に対するそれぞれの捉えを高めていくと考えている。本校が、これまで取り組んできた「支持的風土を大切にしたい集団づくり」は、子どもたちの人間関係や学びの土台となるものである。来年度以降も、引き続き実践を積み重ねていく必要がある。「ICTの効果的な活用」については、教師の授業改善と併せて、子どもたちがタブレットを筆記用具と同じように「道具」として扱うことができる姿を目指したい。授業研究会については、昨年度や今年度のような「大会」における一斉授業公開ではなく、年間を通して「各学年1授業公開」へと変更し、継続した研究推進に努めたい。学校関係者自由記述にもあるように、「自己肯定感」や「コミュニケーション能力」、「自分から発表する意欲」は、これからの時代を生き抜く子どもたちにとって必要な資質・能力であるため、校内研究においても大切にしていきたい。			
	2 協働する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善(ICTの活用含む)	B	A						
	3 主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会の実施	B							
道徳教育の充実	4 生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動の実施	B		○教師のアンテナは高くもつことができた。●道徳教育をもっと充実していく必要がある。●日々の生活の中で、すぐに指導するようにした。命の観点の道徳学習を行ったから。生活の学習でつかまえた虫をぞんざいに扱う姿があり指導をしたが、生命を尊重しようという思いを持たずにはなかった。児童委員会による活動が例年より活発であった。○道徳科の授業を通して、児童と話すことにできなかった。●意識的に活動を行うことは難しかった。○全校道徳参観の実施など、道徳的実践力を高めるように努めた。●道徳部会の教員で協議する機会は多くもたれていたと思うが、学校全体として共有し、研究することはできていなかったように思う。●道徳を授業案からしっかり考える機会が少なかった。○道徳科の授業公開をしたら、保護者等々に向けて道徳科の授業を公開を行い、本校の道徳科の取り組みを知ってもらう機会を設けることができたため。	道徳教育は家庭教育が大きなウェイトを占めると思う。●挨拶の大切さや言葉遣い等、保護者にも考えていただく時間があることも良いと思う。○児童たちの掃除をしている姿には、本当に感心させられる。子どもがそうきんを使って廊下を拭いている姿を見て自分も恥ずかしくなる。見事に皆が普通に掃除をしているのは、お互いに清潔に対する意識向上や自分たちが使用する場を自分たちで力を合わせてやるという協働性や社会性を大に育んでいると思う。ぜひ継続してほしい。○今日の社会状況から「人育て」心育も指導に取り組んでいきたいと思っている。一層の充実を期待する。●保護者への道徳教育のふみこみを期待する。○今の流れのなか、みんなの意見を発表し、少数意見でもふみこみで深掘りしているのはとても良いと思う。また、道徳の授業公開はそれからも積極的に実施してほしい。●道徳の授業公開は行われているが、大人数での授業となると取り残されている児童が見受けられるように感じる。	昨年度と比べて自己評価の部分が軒並み0.1～0.4pt下がってしまっている。一番ポイントの下がり方が小さい生命尊重に関して大きく、生徒指導や日々の教職員の取り組みによるところが大きく、道徳学習による効果は薄いように感じている。もともと下落率の大きかった保護者の参加については、道徳を公開して終わりにしてしまっていることが問題であると考えている。様々な視点からの研究についてもポイントが低くなってしまっている。そこで、来年度はせつかく道徳参観をしているのだから、お家で話してもらうように、学年通信等を通じて保護者のリアクションを求めているかどうかと思う。また道徳の授業実践研修の充実も行っていい。	 		
	5 ものごとを様々な視点からとらえ考えさせる道徳科の授業・評価に関する研究	B	A					 	
	6 保護者等への道徳科の授業公開	B							
体力づくり	7 たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善	B		○体育科学習をどの単元も残さず行い、着実に能力を高めることができた。○子どもたちはいきいき体育の授業に取り組んでいるように思う。○自分だけでは理解が十分でない運動や指導内容については、経験のある教員に助言を求め、その内容を生かして授業を構成した。また、ICTを活用して動きのポイントを繰り返し確認できるようにすることで、児童が安心して取り組み、意欲的に体を動かせる授業づくりを行った。○全校で体育カードの宿題を出し、体力の向上に努めた。○夏休みにもつ子箱の研修会を校内で行った。○夏休みに余裕があるときは、外遊びを共にに行った。●何度も取り組む姿もあったものの、挑戦を後押しするような工夫があまりできなかった。●子どもが前のめりになる授業づくりを心掛けたが、評価の点ももっと充実させたい。●体育の単元を進めることに精一杯で、工夫をするところまで至らなかった。●体育の宿題を出しているものの、日々の体力づくりまでは言いえない。●生涯にわたって健康を保持増進しようという意欲が育成できているかは不明。授業のためのため保健の学習で子どもたちに指導した。	昔は、遊びの中で体力づくりができていたが、現代の子どもの遊びを見てみると学校での体力づくりが昔以上に重要だと思う。走るなど単純なことを我慢して続ける訓練は重要である。体力的な点が懸念されていることは聞いている。SNSの普及拡大や家族の意識下校後の時間の使い方の変化等により体力づくりはさらに難しくなっていると思う。授業の改善・工夫だけではなかなか変えられないと思う。学校(授業)家庭(家族の意識)地域の協力等により児童から見て楽しく興味関心を持って「体力づくりの活動」に取り組んでほしい。健康保持の源である。興味関心の個人差も出てくるのでその点の配慮・工夫の取り組みが必要であろう。マラソン大会、運動会での協議等の再開です。また、心と体を育ててほしい。日常的な体力づくりの取り組みの継続が大切かと思う。●体育の授業を見たけど少し不安になった。現代の便利な生活が、体力低下の一因になっており、体力づくりに関しては不安が強い。体力づくりをもっと厳しくしてもよいかと思う。できるだけ繰り返す力をつけてほしい。	まず、体育の学習で運動量の確保は大前提にすること。体育の学習の中で競い合ったり、記録を高めたりする経験を通して繰り返し取り組むことで「できた」を味わえるような学習を設定すること。休み時間以外遊びのような体を動かす時間を委員会イベントや行事で参加しやすい環境を整えること。保健の学習で「体を動かす必要性」についてきちんと指導し、運動する子としない子の二極化を避けるようにしていくこと。	 		
	8 体力づくりを推進する運動実践	B	B						
	9 生涯にわたって健康を保持増進し、進んで体を動かそうとする意欲の育成	B							
指導改善(組織的・計画的)	10 学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善	B		○学力向上を意識したノートづくり、発問、考え方を説明する活動など、十分に時間を確保した。○長等つ子タイムで「つながりスキル」を高めるような取組を行った。○授業では児童が自分の考えをもつことを大切に、必ず一人で考える時間を取り入れた。そのうえで、考えを交流する活動につなげることで、理解の深化と学習意欲の向上を図った。○ICTの活用に向けて勉強し、少し使えるようになったことで、指導における工夫の選択肢が増えた。○支援を必要とする児童についての指導方法について研修を受けた。○支援の方法を考えた。○OJTや校内研だけでなく、日常的な情報共有を通して、教職員の指導力や情報活用能力の基盤作りができており、能力向上を図る取組も進めることができていると感じるため。○困った時に、互いに助け合える組織になっている。○常に一人で抱え込まず、児童と対一の指導にならないよう配慮しながら、組織的な指導を行うことができた。○定時退勤を常に意識し、見直しをもって仕事ができる。●働き方改革の取組は一定進んでいるが、定時退勤日の運用については、今後検討の余地があると思うため。○学年で同じ教材や準備物を使う場合は、分担して作成することで教材研究を効率的にすることができた。○退勤時刻を意識して仕事を進め、退勤時間を昨年度より早くすることができた。○働き方の見直しを行い、効果的な教育活動が実践できるように努めた。○To doリストを常に作成し、見直しをもって取り組むようにした。	全国学力・学習調査の結果からもわかるように工夫された学習指導の成果だと思ふ。大人になって役に立つ知識のほとんどは小学校での学習だと思ふ。引き続きこの高い指導力をお願いしたい。学力向上を目指して活動してあげられることは授業を見て又プロジェクト等の活動を見て充分感じている。組織的な教育力の向上や質の改善は行政と併せて取り組んでほしい。働き方改革、指導改善に運営協議会としてお手伝いができることを望んでいる。学力がいつも上位である結果を見て先生方の指導の賜物かと思っている。まじめな人が多い。教職員の話し合いや工夫改善が見られる。働き方改革で作業する時間は少なくなっていると思うが効率よく指導しており、質は高いと思う。	昨年度と比較し、項目1は±0、項目2は-0.2、項目3は-0.2となった。学力向上については、基礎的な学力の定着を図りつつ、次期学習指導要領に描かれている(描かれるであろう)資質・能力を的確に捉え、教師の授業改善につなげていきたい。必要な情報を収集したり知ったりする能力、情報を分りやすく発信する能力、ICTを使いこなすスキルは、子どもたちの学習の基盤となる資質・能力である。それ故、子どもたちの学びの伴走者である教師も、情報活用能力を身に付けておく必要がある。子どもたちの学びの実態に即した指導をできるように、OJTや研究推進部、情報部が連携を取りながら進めていきたい。働き方改革の取組については、定時退勤日を設定することで、見直しをもって仕事を進めるという点においては一定の成果を得ることができた。一方で、その実施の仕方(曜日や頻度など)については、更なる改善・検討が望まれる。改革の推進と子どもの育ちをトレードオフにしないためにも、子どもたちの実態(課題も含む)を基に研究主題を設定し、校内研究を推進することで、教育活動の質を高めていきたい。	 		
	11 教職員の指導力、情報活用能力、及び組織的な教育力の向上	B	A						
	12 働き方改革の取組と教育活動の質の改善	B							
育ちと学びを支える連携	① 家庭・地域との連携・協働	13 子育てや家庭教育に対する 保護者への積極的な支援	B	○保護者に向けた情報発信やSOCの活用など相談対応による支援が進んでいると考える。○面談の時に保護者の思いを聞き、普段からその思いに寄り添った対応を心掛けた。○毎日の連絡帳を通して、その日の出来事を家庭と共有し、子どもがより良い成長できるように、意見交流できた。○タブレットを活用することで、長期休業期間や学校閉鎖期間の学習支援を実施した。●積極的に「まで」まで分かれば分らない。○町探検、大規模栽培など地域の方や保護者の助けをたくさん借り、よりよい教育活動ができた。地域とは学校運営協議会を通じて、交流や情報発信、保護者の機会を最大限に活用することができた。○交通安全教室や生活科での幼稚園、子ども園との交流など、地域の方々がよく協力してくれたり、ありがたかった。○地域の運営協議会では、地域の方と交流し、教育について共に考えることができた。○スマイルプロジェクトでは地域の連携がとれた。○地域人材の活用はできたが、情報発信についてはできていない。○運営協議会やスマイルプロジェクト、各学年の授業等々で、地域の方の手厚い協力があることに感謝したい。○防災教育を総合的な学習で行い、長等学区の防災ボランティアを招いて避難所体験を実施した。●防災教育はできていたが、感染症対策の推進に関して地域の実態まで踏まえて対応できていたかと問われるとできていたと言えない。○避難訓練やエイプアウト訓練など、必要な時期に適切に実施されていたと思う。○手洗いの励行、地震が起きた時の素早い動き、などについて、日頃から話をし、実践した。○自身の体験を子どもたちに話すことで、防災の大切さや、感染症の対策の方法を伝えることができた。○社会の学習では、教員だけでなく地域の方と連携して、児童たちへの防火に対する意識を高めることができた。○インフルエンザの流行を踏まえながら、自分自身の健康増進にも努めることができた。	○学校と地域との繋がり、関係性は良好な地域だと思ふ。地域にはまだまだいろいろな人材があるので活用してほしい。○保護者と地域との連携・協働は他校よりできていると考える。PTA、まちづくり協議会・運営協議会等と連携協力をし、さらに進めてほしい。又、長等小学校の地理的なメリット(大津市の中心で行政機関が近い、文化的なものも存在等)を生かしてさらに生かす、多方面での連携・協力をより積極的に進め、特に今の指導は保護者さんの意識を改善できたからである。家庭教育が行き届いていない今の指導は大変難しいと思うが細かくサポートしてあげられる。地域との連携については活動が目に見えやすい形で行われていた。地域とのつながりが強く、子育てしやすい環境だと思ふ。子どもとも素直につながっており、長等のおかげだと思ふ。地域とつながっているのだからイベントがありがたいな経験ができる。時代的に仕方ないかもしれないが保護者への情報発信は少なく感じる。教室内で感染症対策を先生方はかなり念入りに行っていたことに驚いた。	長等の子どもの育成について、引き続き学校運営協議会で考えていく。ホームページ等での学校の教育活動の様子を毎日積極的に発信していく。毎年、多くの地域の方の協力により授業や行事に参加していただいている。地域の人材の活用を学年ごとのカリキュラムの中に明示し、どのような方にもどのような内容でお世話になったのか、分かるような申し送りが必要である。さらに地域の教材、人材を生かした教材づくりをしていく。	 		
		14 保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域人材の活用	B	A					
		15 防災教育・感染症対策等の推進を含む、地域の実態に応じた安心・安全な学校づくり	B						
	② 保幼小中の連携	16 子どもの校種間交流や教員の出前授業	B		○1年は幼稚園、6年は中学生と交流できた。○高校生による出前授業を行った。○生活科で、幼稚園や子ども園の子どもたちに秋のいちおしクイズを出したり、秋まつりに招待したりと交流する機会を多く設定できた。○体育や生活科の学習で地域の園児を招き授業に参加してもらった。○5・5交流や、架け橋カリキュラム作成などに取り組めた。○幼稚園・子ども園の子とも達と1年生との交流に、交流学級へついていくことで一緒に参加して、異年齢交流の良さを実感することができた。○中学校での授業の見学や、中学校の先生と児童の様子(卒業生 在校生)について、情報の交換をした。●長期休みのみ実施があった機会があった。○第6学年としては、小中連携として、SNS講話を皇子山中学校に聞きに行き、共に学んだ。また、中学校教員や中学生に小学校に来ているいただき、出前授業や交流を行う予定である。○小中合同研修などでは取り組んだOSK会議を開催し、皇中校区について話し合いができた。○近畿小学校社会科教育研究協議会での充実した研修を行ったため。○初任者研修の一環で幼稚園実習につき、幼児教育と低学年の発達をつなぐを学ぶことができたから。○幼稚園の作品展に行ったり、生活科の授業公開を行った。●夏休みの大津絵かき思いつないため。○皇子山中の先生が毎月来校されるなど、先を見据えた交流はできている。○幼稚園の先生と子どもの様子を話ながら「架け橋プログラム」を作成した。カリキュラムを作りそれをもとに話し合うことができた。	○保幼小中の連携は良くとれていると思う。○中学校が長等学区にあるのも有利だと思うし利点は生かすべきだと思う。○皇中、長等幼、みづばちこども園、長等児童クラブとの連携は取っていただいていると思う。適切なことな(継続して)いていただく大切さを感じている。保幼～中までの一貫教育的な情報共有をさせていただき様々な変化にも対応してほしいと考える。○5・5交流が浸透しているため入学後の子どもたちも安定しているように見受けられる。保幼小中の連携はとも良い取り組みだと思ふ。さらに年上である実感から行動はより良く考へたいと思う。○保幼幼稚園から小学校入学、小学校から中学校入学へ不安をなくす試みをしてきている。幼稚園から入学前に体験入学のような(給食を食べたり)行事の復活を希望する。	全学年での交流は難しいが、1年生、5年生、6年生を中心として連携を図っていく。保育・授業の参観や、懇談による架け橋カリキュラムの作成、生活科の授業を通じた交流などの1年生と保育園・幼稚園の連携。5・5交流を中心とした、5年生と保育園・幼稚園の連携。OSK会議、授業参観や出前授業などを通して児童・生徒理解を深めていく6年生と中学校との連携。この3つを柱として、学校として連携を継続していく。教頭、教務主任、生徒指導担当が集まった話し合いができたことは有意義だった。今年度は1回のみであったが、1学期に1回程度は集まり、連携が取っている。		
		17 校種間の授業公開や合同研修会	B	A					
18 保幼小中の接続期の教育課程編成等、円滑な接続を図る校種間のカリキュラム研究		B							
組織的体制の充実	① 生徒指導体制の充実	19 いじめや暴力行為、不登校等生徒指導上の諸課題の早期発見、日常的な予防指導 ※	A	○こどものアンケートの回答やこころの健康観察、ふりかえりアンケートを活用して、気になる児童への声かけや見守りを行うことができた。○日常的な見守りや情報共有により、課題の早期発見や予防的対応に繋がることができた。○些細な変化や児童同士の会話にもアンテナを高くもち、気づいたらその都度声をかけたり話を聞くことを意識して取り組んだ。○不登校児童に対して、個に応じた支援(放課後登校や、多動でさうな学習)を保護者と連携して取り組んできた。○児童の顔色や行動から、違和感を感じた時は必ず声をかけ、話し合う場を設けることができた。○顔と顔の間に下駄箱を立てて、声をかけることができた。○校外、校内の巡視や、不登校児童の把握、支援、情報共有に努めた。○きめ細やかな観察や、組織的に進められたと思う。○いじめは絶対許さない態度で指導している。○言葉遣いや自分の気持ちを手で伝える練習ができた。○学級活動を中心とした特別活動の充実や一人ひとりに寄り添った授業を行うことで、日常的な予防活動を行っている。●必要に応じて連携をとることができた。○一人で判断しないことを徹底し、管理職、学年、生徒指導主任、教務主任、子ども支援コーディネーター、養護教諭と日常的に協力して事業に対応した。○ケース会議や打合せを定期的に行い、小さなことも報告し、情報共有を図ることで、組織的な対応につながることができた。○教育相談担当として、中学進学にむけて児童の不安を取り除くようにした。●組織的に進められたと思うが、情報が密に連携できなかった。○家庭との連絡を密に取り、家庭と共に課題に対応するようにした。○家庭や地域からの意見を学校と家庭・地域にも子どもたちに伝えることができると、さらに連携が深まるように思う。○家庭だけでなく、適切にアセスメントしたうえで多職種と連携して子どもにかかわることができている。○指導したことを保護者と連絡して、学校だけでなく家庭でも見守っていただくことができた。○保護者、ウイング、教育支援センター、こども発達相談センター等と連携をして、子どもとの情報共有を行った。●繋げる機会がないときもあった。	○生徒指導は経験が積むことが必要です。若い教職員の方々を始動させる先生方も苦労されていると思う。○地域の人間が指導はできないが交流を持っていただくきやすい話をお願いしたい。●いじめかと思ふ。○SNSの普及や多様な書き方により以前のような一律の指導、教育ができなくなっている。○様々な状況の児童に対して対応していくには、各家庭保護者、地域、関係機関と学校が連携していることが大切である。○教職員間の意見交流や意思の疎通を図ろうとする努力が大切である。○いろいろな仕組みを取り入れていただけて対応していただいているがSNS問題など課題が山積みで、まだ追いついていないと思う。○いじめにつながるがしりょうな事柄に対しては厳しく対処して欲しい。	いじめ・SNS・性に関わる問題等は、年々複雑化し、低年齢化している。子どもたちが安心して過ごせるためには、問題の未然防止と組織対応が重要である。日頃より、子どもたちの表情や声のトーン、発言、態度にアンテナを張り、違和感を感じたときには職員が情報共有し、子どもたちを支えることに努めた。学年はその都度子どもの様子を共有し、全職員でも毎週の定期的な打ち合わせで確認することができた。また、保護者・地域・関連機関と連携することで、子どもへの支援方法をより深く考えることができる。日頃より、子どもたちが自ら学習し、選択し、決定する体験が大切であり、今後も継続して、各教科の学習にその体験ができる場を必要に応じて設定したい。次年度も、未然防止の指導と組織対応を継続していく。児童の様子や人間関係、学習状況を継続ととも、個別の指導計画を有効に活用できるよう、前年度までに行ってきた支援について確実に引き継いでいくことが大切である。特に効果的な支援について年度が変わっても途切れることなく続けていけるような体制を組織的に構築していく必要がある。学年ミーティング、部会、就学指導委員会、特別支援コーディネーターと担任とのミーティングやケース会議などで児童のアセスメントを丁寧に行い、そこから得られる情報を一覧にしてまとめて、児童を統括的に支援していけるようにする。特別支援、教育相談の年間計画について、年度当初にしっかりと共通理解を図り、年度ごとに見直しをしながら、職員全体が見直しをもって取り組めるようにしていく。	 		
		20 生徒指導・教育相談体制の確立と組織的な推進 ※	B	A					
		21 家庭・地域・関係機関との連携による指導	B						
		② 特別支援教育の充実	22 個別的教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用	B		○個別の指導計画の内容を大切に進めた。支援計画の作成と評価のタイミングで児童の指導の仕方について見直すことができた。○保護者と密に話し合えば支援の方法を決め、行っている。○個別の指導計画を共有し、家庭と連携しながら支援を一貫して活用した。○個別の指導計画が必要な児童にはどんな指導が適正か考え実践することが出来た。○作成、面談等が計画的にできた。○面談日以外にも必要な児童については、別日に面談日を入れて、こまめに児童の様子や伝わるようにした。○重点となる目標を常に意識しながら指導に当たった。○年間計画の中に、個別の指導計画を位置づけ、周りに活用を働きかけることができた。○前期・後期の面談が行われている。○コーディネーターや通級の担当とともに相談しながら進めることができた。●個別支援教育体制の整備に向けた取組は行われていると思うが、組織的・計画的な運用の面では、今後さらに検討が必要であると考えられる。○特別支援学級など児童の実態を共有して連携したりすることができた。○特別支援部会では特別支援教育の在り方について話し合ったり、情報共有を行っていた。○特別支援教育推進員を中心に、協力して、子どもを見取り、放課後に情報共有による対応を模索した。●必要に応じて連携をとることができた。○計画的な取組を進めることができた。○分掌担当を中心に部会での周知がある。またきめ細やかな対応をしている。組織で対応している。○1年後を見通した支援ができた。○必要な関係機関と連携を密にしながら、相談・連携できている。○家庭や本人の課題を把握・整理し、状況に応じて関係機関と連携した相談体制を整えることができている。○専門機関の話を聞いて、支援に組み込めた。○ウイングなどの機関と連携できた。●難しいかもしれないが、医療機関との連携がもたらせることとしたい。●不登校児童の対応で担任の負担が大きい。	特別支援教育は対象の子どもさんが多岐にわたり専門的知識を必要とするので地域の人間のかわかりは難しいですが活用できることは地域を利用してほしい。全国的に「特別支援教育」の難しさが大きな課題になっていることを把握している。さらに人手が少く苦労をおかけしますが、行政・関係機関と連携協力をしてぜひ進めたいと思っています。○いろいろな方との交流を行っていただいたりとても高いレベルで教育していただいていると思う。○学校側は個別の支援について手厚く考えてくれるが、○大津市側が手いっぱい簡単に相談を受けられないのが残念だと思ふ。		
23 組織的・計画的な特別支援教育体制の確立	B		A						
24 関係機関と連携した相談体制の充実	B								